ガンダーラ仏教図像にみられる儀礼表現の研究

——「結婚式」の場面を中心として——

濵　本　彩　萌

はじめに

ガンダーラでは、数多くの仏伝の場面が新たに制作された。そのひとつに釈迦の結婚式（以下、「結婚式」とする）だと考えられる場面があり、数々のガンダーラ仏伝図の場面を特定したフーシェ（Foucher, A.）の解釈[①]が現在も踏襲されている。フーシェは、この場面にみられるのは「結婚式の浄法（vivāha-saṃskāra）[②]」であり、「(新郎新婦が）手をつないで水壺と聖火の周りを回るという、ヒンドゥー教の結婚式で行われる儀礼が描かれている[③]」と述べているが、その根拠となる資料には言及しておらず、仏伝文献にみられる「結婚式」の場面も取り上げられていない。それにもかかわらず、この場面はフーシェの研究以降あまり注目されず、展覧会図録等にみられる各種解説文もフーシェの意見に則るものがほとんどで[④]、この場面に焦点をあてた研究はほとんど行なわれてこなかった。そのようななか、数少ない先行研究にヴェラルディ（Verardi, G.）の研究がある[⑤]。ヴェラルディは、ガンダーラの仏教図像にみられる火の儀礼に関する研究を行なっており、その一部で「結婚式」の場面を取り上げている。彼は「結婚式」の場面にみられる儀礼表現について、ヴェーダ祭式に基づくヒンドゥー教の婚姻儀礼との関係に言及しているが、やはりその根拠となる資料はあげられておらず、仏伝文献との比較対照も行なわれていない[⑥]。

よって、本稿では、仏伝文献および古代インドの祭式文献を参照し、俯瞰的な視点から、ガンダーラ仏伝図における「結婚式」の場面に描かれている儀礼表現を明らかにしていきたい。

I. ガンダーラ仏伝図にみられる「結婚式」の場面

まずはじめに、伯林寺所蔵の作例〔図１〕を例にとり、図像の詳細を確認していこう。ガンダーラ仏伝図にみられる「結婚式」の場面は、細かな部分でヴァリエーションがみられるものの、基本的には〔図１〕のような構図になっている。本作例はコリント式柱頭をもつ柱によっ

て二区画に区切られており、その向かって右側の区画に「結婚式」の場面が表現されている。画面中央に向かい合って立つのは釈迦と花嫁である。釈迦はターバン冠飾をつけ、瓔珞などの装身具を身につけている。釈迦の左隣に立つのは花嫁で、長いヴェールをまとっている。釈迦は左手を腰にあて、右手を花嫁に差し出し、その右手を握っている。釈迦と花嫁の間には、足元に祭火と二つの壺が置かれている。その傍らにはバラモンが椅子に腰掛けており⑦、柄杓で祭火⑧に酥油を注ぎかけている。〔図１〕では、彼らの背後に、花嫁に従う侍女、釈迦に傘蓋を差し掛けている男性のほか、楽器を携えた三人の男性たちが認められ、婚礼にふさわしい華やかな音楽が奏でられている様子がうかがえる。

このような「結婚式」の場面を表した作例は、管見の限り19例ある。これらに共通する大きな特徴は、①釈迦と花嫁の双方の右手が繋がれていることと、②足元に祭火が描かれていることの２点である【表１】。〔図４〕や〔図５〕のように、釈迦と花嫁が動きのある表現をみせる作例も多数みられる。また、②に関連する特徴として、〔図１〕でみたように、③祭火とともに壺が描かれている作例があることにも注目したい。壺を描く作例は全体の半数以上を占めるが、描かれる壺の個数は作例によって異なり、一定していない【表１】。

【表１】「結婚式」の場面　作例比較表

番号	①繋いでいる手		②祭火	③壺（個数）	連続する場面
	釈迦	花嫁			
1	右手	右手	○	2	
2	右手	右手	○（台上）	2	
3	右手	右手	○	2	
4	右手	右手	○	2	
5	右手	右手	○	2	宮廷生活（左）
6	右手	右手	○	2	宮廷生活（左）
7	右手	右手	○	2	宮廷生活（左）
8	右手	右手	○	2	競技武芸（右）
9	右手	右手	○	2	競技武芸（右）
10	右手	右手	○	2	
11	右手	欠損	○	2	
12	右手	右手	○	1	
13	右手	右手	○（台上）	1	
14	右手	右手	○	0	
15	右手	右手	○	0	妃の輿入れ（左）
16	右手	右手	○	0	妃の輿入れ（左）
17	右手	左手？⑨	○（台上）	0	
18	右手	右手	欠損	欠損	
19	右手	右手	欠損	欠損	

（筆者作成。番号は本稿末の図版に対応）

また、「結婚式」をあらわす作例の多くは、〔図１〕と同様に片端または両端をコリント式柱頭をもつ柱で区切られたもので、その形状や、左あるいは右に残る連続する場面から、奉献小塔などの胴部に配される連続した仏伝図の一部であることがわかる。前後の場面をみると、「結婚式」→「妃の輿入れ」〔図15，16〕、「結婚式」→「宮廷生活」〔図５，６，７〕、「競技武芸」→「結婚式」〔図８，９〕といった配列がみられ【表１】、この場面が釈迦の仏伝の一場面であることを裏付けている。

以上、ガンダーラ仏伝図にみられる釈迦の「結婚式」の場面をみてきた⑩。「結婚式」の場面をあらわした作例を検討した結果、共通する特徴として①、②および③のモティーフがみられることが明らかとなったが、これらの図像はどのように成立したのだろうか。次章では、仏伝文献にみられる「結婚式」のエピソードに図像の成立と関連する記述がみられるかどうか考察していきたい。

II. 仏伝文献にみられる「結婚式」の場面

釈迦が結婚したことは多くの仏伝文献が伝えているが、その内容にはヴァリエーションがある。まず、「結婚式」に関する記述の有無に焦点をあてるならば⑪、釈迦が妃を娶ったことを述べるだけで結婚式に関する記述は一切みられないもの、妃を王宮に迎え入れる際の描写がみられるもの、結婚式に関する記述があるものなどに分類できる。今回筆者が参照した主要な仏伝文献を上記のヴァリエーションに沿って分類すると、以下のようになる⑫。

(A)　妃を娶ったことのみ述べる

- 『ニダーナカター』*Nidānakathā* (*Jātaka*. vol. I, p. 58; N28, p. 123)
- 『ブッダチャリタ』*Buddhacarita*, 02-26 (馬鳴作, Bc. p. 15)
- 『マハーヴァストゥ』*Mahāvastu* (Mv. vol. II, p. 48)
- 『太子瑞応本起経』巻上 (呉/支謙訳　T3, p. 475a)
- 『異出菩薩本起経』巻第一 (西晋/竺道真訳　T3, p. 619a)
- 『仏所行讃』巻第一　處宮品第二 (馬鳴作、北涼/曇無讖訳　T4, p. 4b)
- 『仏本行集経』巻第十四　常飾納妃品下 (隋/闍那崛多訳　1～3人目：T3, p. 715b-c)
- 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻第三 (唐/義浄訳　1人目：T23, p. 112a/ 2人目：T24, p. 112c/ 3人目：T24, p. 114b)
- 『衆許摩訶帝経』巻第四 (宋/法賢訳　1人目：T3, p. 942c/ 2人目：T3, p. 943c/ 3人目：T3, p. 945a)

(B) 妃を迎え入れる際の描写がある（結婚式に関する記述なし）

・『修行本起経』巻上　試芸品第三（後漢/竺大力共康孟詳訳　T3, p. 466a）

・『普曜経』巻第三　試芸品第十（西晋/竺法護訳　T3, p. 502a）

・『仏本行集経』巻第十三　捔術争婚品下（1人目：T3, p. 712c）、巻第十四　常飾納妃品上（3人目：T3, p. 714c）

・『方広大荘厳経』巻第四　現芸品第十二（唐/地婆訶羅訳　T3, p. 564c-565a）

(C) 結婚式に関する記述がある

・『仏本行経』巻第一　入誉論品第七（宋/宝雲訳　T4, p. 63a）

・『過去現在因果経』巻第二（劉宋/求那跋陀羅訳　T3, p. 629b-c）

・『ラリタヴィスタラ』*Lalitavistara*, XII, Śilpasaṃdarśana-parivartaḥ（第十二章　伎芸示現品）（外薗［1994］梵：p. 592, 和訳：p. 907）

このように、釈迦が妃を娶ることや、妃を王宮に迎え入れる描写のみを記す仏伝文献が大半を占めており、「結婚式」そのものに関する記述をもつ仏伝文献は非常に少ない。ここでは、「結婚式」図の特徴と、仏伝文献にみられる記述との関連性を確認するため、特にC群の仏伝文献に注目してみよう。まず、それぞれの仏伝文献にみられる「結婚式」に関係する記述を以下に確認していきたい。

『仏本行経』[13]

王即令求女父母来。賜与珍宝、不可称計。召明梵志、卜択良辰。<u>塗香坦地、飾以衆花。以神咒酥、充飽火神。灌太子手、父母授女、為太子妃</u>。（T4, p. 63a. 下線は筆者。以下同様）

『過去現在因果経』

王即令諸臣択採吉日、遣車万乗、而往迎之。既至宮已、<u>具足太子婚姻之礼</u>、又復更増諸妓女衆、昼夜娯楽。（T3, p.629b-c.）

『ラリタヴィスタラ』 *Lalitavistara*

ダンダパーニ釈種は、自分の娘たるゴーパー釈女を、菩薩に与えたり。斯くて、彼女は、シュドーダナ王によって、<u>儀軌に則って、菩薩の嫁と為されたり</u>。（外薗［1994］p. 907）[14]

以上が、C群の仏伝文献にみられる「結婚式」の場面周辺の記述である。特に下線部の記述

に注目してみよう。『過去現在因果経』では「太子は婚姻の礼（婚礼）を具足し（既至宮已、具足太子婚姻之礼…（T3, p. 629b-c））」とあり、『ラリタヴィスタラ』では「儀軌に則って菩薩の嫁と為す」と述べられている。これらは明らかに結婚式に関する記述ではあるが、「婚礼が行われた」というのみで、婚姻儀礼の詳しい内容はみられない。

これに対して、『仏本行経』では「結婚式」に関する詳しい内容をみることができる。以下、『仏本行経』にみられる記述を詳しくみてみよう。

> 王は娘の父母に（王宮に）来るよう命じた。（王は父母に）珍宝を賜与し、数えることができないほど褒め称えた。（ヴェーダに）よく通じたバラモンを呼び、吉日を選んだ。地面に香を塗り、たくさんの花で飾った。マントラと酥（油）で火神を満足させた［供養した］。太子の手に（水を）濯ぎ、（娘の）父母は娘を（太子に）授け、太子の妃にした。

このように、『仏本行経』には先述の2種の仏伝文献よりも詳細な描写がみられる。とりわけ、下線部にみられる「地面に香を塗り、たくさんの花で飾った。マントラと酥（油）で火神を満足させた[供養した]。太子の手を（水で）濯いで、（娘の）父母は娘を（太子に）授け、太子の妃にした」という記述は明らかに儀礼を描写している。

では、このような描写は、浮彫にみられる図像の特徴と一致するだろうか。先述したとおり、「結婚式」図の特徴は、①釈迦と花嫁の双方の右手が繋がれていることと、②足元に祭火（および③壺）が描かれていることであった。まず、『仏本行経』について、①に関する記述はみられない。続いて、②および③に関しては、「マントラと酥（油）で火神を満足させた（供養した）。（以神咒酥、充飽火神。）」という記述との関連を考えることができるが、この記述だけでは図像と一致するとは言い難い。よって、『仏本行経』には確かに儀礼をあらわしたと思われる描写がみられるものの、図像と完全に一致するわけではないといえる。しかしながら、「結婚式」に関する詳細な描写がみられる仏伝文献は、管見の限り『仏本行経』のみであり、このことは注目に値するといえよう[15]。

以上、仏伝文献にみられる「結婚式」の場面を考察してきたが、図像を解釈しうる記述はほとんどみられなかった。よって、「結婚式」の場面にみられるモティーフを仏伝文献だけで読み解くことは難しいといえる。次章では、古代インドの祭式文献であるグリヒヤスートラ（Gṛhyasūtra[16], 以下GS.）にみられる婚姻儀礼に関する記述を手がかりとし、図像の特徴および『仏本行経』にみられる儀礼の描写との関連性を考察していきたい[17]。

III. 『グリヒヤスートラ』(Gṛhyasūtra) にみられる婚姻儀礼

古代インドにおける婚姻儀礼に関しては辻直四郎氏の研究に詳しく、そこではGS.にみられる婚姻儀礼が整理されている[18]。また、はじめに述べたように、ガンダーラの「結婚式」図に関する先行研究に、ヴェラルディの研究がある。ヴェラルディは、「結婚式」の場面にみられる儀礼はヴェーダ祭式に基づくヒンドゥー教の婚姻儀礼であるとし、釈迦が花嫁の右手をとり火と水の入った壺のまわりを歩く様子が描かれていると述べ、結婚式に関する儀礼のうち特に火を用いるアグニ・パリナヤナ (agni-pariṇayana) やホーマ (homa) などに注目している[19]。ヴェラルディが注目したこれらの儀礼は、古代インドの婚姻儀礼に関する研究において特に重要なものだと考えられている[20]。

それでは、図像の特徴である、①釈迦と花嫁の双方の右手が繋がれていること、②足元に祭火（および③水壺）が描かれていることについて、関連する儀礼を考察していこう。

①釈迦と花嫁の双方の右手が繋がれていることに関連性が認められる儀礼は、パーニグラハナ (pāṇigrahaṇa) である。パーニグラハナは花婿が花嫁の手を握る儀礼で、結婚式で行なわれる諸々の儀礼のうち最も重要な儀礼の一つだとされている。ここでは、シャーンカーヤナ・グリヒヤスートラ (Śāṇkhāyana-Gṛhyasūtra, 以下 Śāṇ.) にみられる記述をみてみよう。

> 「我は幸福のために汝の手を握る」と唱えながら、彼（花婿）は右手で彼女（花嫁）の右手を親指も含めて握り、双方の掌を上に向ける。彼は顔を西に向けて立ち、彼女は顔を東に向けて座る[21]。

下線部からわかるように、「(花婿は) 右手で新婦の右手を握る」ことが規定されている。ここで規定される掌の向き、手の握り方についてはGS.の間に差異があるが、右手と右手を繋ぐことはどのGS.にも共通する[22]。

第I章で確認したように、図像では、ほとんどの作例において釈迦と花嫁の双方の右手が繋がれていた。単に手を繋ぐことを描写するだけであれば、釈迦の右手と花嫁の左手が繋がれる作例が混じる可能性もあり、このように表現が統一されるとは考えにくい。よって、図像にみられる「右手と右手を繋ぐ」という表現は意図的なものだと考えられる。また、第II章でみたとおり、「右手と右手を繋ぐ」という表現の典拠となる記述は仏伝文献に求められなかったが、アグニ・パリナヤナには「花婿は右手で花嫁の右手を握る」ことが規定されており、図像にみられる表現を解釈することが可能である。ただし、この儀礼では、先述の Śāṇ. にみられるように、「右手と右手を繋ぐ」ことと同時に、新郎は立ち、新婦は座るという姿勢が規定さ

れている場合がある[23]。「結婚式」図にみられる釈迦と花嫁は右手と右手を繋いでいるが、花嫁が座っている作例はみられず、図像にみられる表現とGS.に規定される儀礼が完全に一致しているとはいえない。しかしながら、右手同士を繋ぐという点において、図像とGS.にみられる記述が近い表現をみせることは注目に値するといえよう。

続いて、②足元に祭火（および③水壺）が描かれていることに関係すると考えられる儀礼を考察してみよう。この描写との関係性が深い儀礼として、ヴェラルディも指摘しているとおり、アグニ・パリナヤナを挙げることができる。アグニ・パリナヤナは、新郎と新婦が祭火のまわりを歩く儀礼である[24]。たとえば、アーシュヴァラーヤナ・グリヒヤスートラ（Āśvalāyana-Gṛhyasūtra, 以下Āś.）には以下のような記述がみられる。

> 彼（花婿）は彼女（花嫁）を導き、祭火と水壺のまわりを、祭火に身体の右側を向けて三回まわる。彼は「我はかれなり、汝はこれなり。汝はこれなり、我は彼なり。我は天なり、汝は地なり。我はSāmanなり、汝はṚkなり。我らを結婚させたまえ。我らに子供を与えたまえ。互いへの愛、栄光、親切な心、100年の命を我らに与えたまえ。」と唱える[25]。

このように、Āś.では、新郎が新婦を先導して祭火と水瓶のまわりを歩くことが規定されている。次に、Śāṇ.にみられる記述をみてみよう。

> 彼（花婿）は彼女（花嫁）を導き、祭火のまわりを、祭火に身体の右側を向けてまわる[26]。

ここでは、右遶の対象は祭火のみで、水壺については述べられていない。このように、GS.によって右遶の対象が祭火のみである場合と、祭火とともに水壺が含まれる場合があるが、右遶の範囲に祭火とともに水壺が含まれるものはĀś.のみであり、そのほかのGS.は祭火のみで水壺は含まれない[27]。

ここで再び、図像の表現を確認してみよう。第Ⅰ章で確認したように、釈迦とその右側に立つ花嫁との間の足元には必ず祭火の表現がみられ、ふたりが祭火を囲んで歩いていることを示すかのような表現がみられる作例が多数存在した。このような、釈迦の「結婚式」図にみられる祭火のまわりを手をつないで歩くという表現は、いまGS.に残るアグニ・パリナヤナの儀礼をみることで理解できる。また、浮彫には祭火と並んで壺を描く作例と描かない作例、壺を描く作例にも壺が1つの場合と2つの場合がみられるなどヴァリエーションがみられた。これに関しては、GS.のなかでも壺の扱いにヴァリエーションが認められる点が興味深い。とりわけ、Āś.には右遶の範囲に壺が含まれているが、他のGS.には含まれないことが挙げられよう。

なお、GS.には結婚式で行なわれる数々の儀礼が規定されているが、その順序は各GS.によってさまざまであり、一定していない[28]。これまでみてきたように、ガンダーラの「結婚式」図の特徴は、①釈迦と花嫁の双方の右手が繋がれていること、②足元に祭火（および③水壺）が描かれていることであった。このような図像的特徴との関連が考えられる儀礼として、パーニグラハナとアグニ・パリナヤナの2つの儀礼をみてきたが、パーニグラハナには「花婿と花嫁の右手同士をつなぐ」という規定がみられたものの、そこで規定される姿勢が異なる場合があり、アグニ・パリナヤナでは「花婿が花嫁を導き、祭火（および水壺）の周囲をまわる」と規定されるが、手の繋ぎ方には言及していなかった。ここで注目したいのは、これらの儀礼はいくつかのGS.では前後に連続して記述されているという点である[29]。ここから、これらの儀礼が連続して行なわれた可能性を考えることができよう。ガンダーラの「結婚式」図は、婚姻儀礼のハイライトともいえるこれらの一連の儀礼を同時に描いたという可能性も考えられるのではないだろうか。

また、GS.の規定する婚姻儀礼の順序と、仏伝文献に述べられる「結婚式」周辺の物語の順序、図像にみられる「結婚式」の場面の順序がそれぞれ異なっているということも指摘しておきたい。GS.では、パーニグラハナやアグニ・パリナヤナなどの儀礼を花嫁の家で行なった後、花婿の家に移動するものと規定されている[30]。一方、仏伝文献では王宮（花婿の家）に花嫁やその両親を呼び寄せている様子がうかがえる。対して、図像では「結婚式」の後に「妃の輿入れ」の場面を配列する傾向が顕著である。この順序をみる限り、仏伝文献よりも図像のほうがGS.の規定する順序に沿っているといえよう。

最後に、GS.の記述と、仏伝文献のなかでは「結婚式」の場面が最も具体的であった『仏本行経』の記述との関連性を考察しておきたい。繰り返しになるが、『仏本行経』での婚姻儀礼の描写は、「地面に香を塗り、たくさんの花で飾った。マントラと酥（油）で火神を満足させた［供養した］。太子の手を（水で）濯いで、（娘の）父母は娘を（太子に）授け、太子の妃にした」というものであった。パーニグラハナおよびアグニ・パリナヤナに規定されているのは「花婿と花嫁の右手が繋がれること」、「花婿が花嫁を導き、祭火（および水壺）の周りを右回りに歩くこと」であるので、『仏本行経』にみられる記述とは一致しない。しかしながら、「火神を満足させた」という表現は、明らかにそこに祭火が有ると想定される表現である。これに関しては、GS.に規定される婚姻儀礼のなかで、祭火に対する酥油の献供が行なわれることが指摘できよう[31]。さらに、「太子の手に（水を）注ぎ、娘を授ける」という表現も明らかに儀礼に関する記述であるが、GS.で規定される婚姻儀礼のうち、この記述に最も近いものに「父が娘を花婿に与える儀式（カニャーダーナ、Kanyā-Pradāna）」という儀礼が認められ[32]、関連性があると考えられる。ただし、図像との関連性からみると、カニャーダーナの記述には、図像の特

徴として取りあげた①と②の要素がみられない。よって、『仏本行経』には確かに婚姻儀礼に関する描写がみられるものの、やはり図像と完全に一致するわけではないといえる。

おわりに

以上、ガンダーラ仏伝図における「結婚式」の場面を考察してきた。「結婚式」の場面を描いた作例には共通して①と②（および③）という図像上の特徴があり、これらの特徴があらわされた意図について、仏伝文献によって比定することができるかどうか、またその表現をGS.によって読み解くことができるかどうかを検討した。考察の結果、仏伝文献には「結婚式」の場面はほとんどみられず、唯一詳細な描写をみせる『仏本行経』においても、婚姻儀礼だと思われる描写がみられるものの、図像の特徴とは一致しなかった。よって、「結婚式」図の諸特徴を仏伝文献から読み解くことは難しいといえる。むしろ、GS.にみられる婚姻儀礼について検討した結果から、ガンダーラの「結婚式」図は、GS.において規定されている婚姻儀礼のうちパーニグラハナおよびアグニ・パリナヤナと非常に近い表現をみせていることが明らかとなった。

以上から、仏伝文献では釈迦の「結婚式」そのものについてほとんど述べられていないにも関わらず、ガンダーラでは「結婚式」の場面が儀礼表現を伴って造形化されたことが明らかとなった。図像にみられる表現がGS.にみられる規定と非常に近い表現をみせているということは、非常に重要だと考えられる。仏伝文献には詳細が述べられていないにも関わらず、図像においては儀礼表現がはっきりと描かれているということは、「結婚式」の場面にみられる儀礼は周知の事実として知られていたということ、つまり、当時のガンダーラでこのような儀礼が日常的に行なわれており、それが「結婚式」図に用いられたということを示しているのではないのだろうか。

略号一覧

Āś-GS.	Sharma, N.N. ed, Eng. tr. [1976] *Āśvalāyana Gṛhyasūtram with Nārāyaṇa's commentary*. Eastrn Book Linkers, Delhi.
Bc.	Johnston, E.H. [1984] *The Buddhacarita or Acts of the Buddha*. Motilal Banarsidass, Delhi.
GS.	Gṛhyasūtra
Jātaka.	Fausbøll, V. ed. [1990] *The Jātaka, together with its commentary, being tales of the anterior births of Gotama Buddha*. Pali Text Society, Oxford.
Mv.	Senart, É. ed. [1882] *Le Mahāvastu*. vol. 2, Paris. (復刻版：名著普及会，1977年刊)
N	南伝大蔵経
Śāṇ-GS.	Sehgal, S.R. ed. [1987] *Śāṇkhāyana gṛhya sūtram, belonging to the Ṛgveda*. Sri

Satguru Publications, Delhi.
T　大正新脩大蔵経
外薗［1994］　外薗幸一［1994］『ラリタヴィスタラの研究（上）』大東出版社.

図版略号

『ガンダーラ』　平山郁夫シルクロード美術館［2009］『ガンダーラ　—仏像のふるさと—』平山郁夫シルクロード美術館.
『栗田I』　栗田功［2003］『ガンダーラ美術I 仏伝（改訂増補版）』二玄社.
『肥塚』　肥塚隆・田枝幹宏［1979］『美術にみる釈尊の生涯』平凡社.
『タレリ』　水野清一・樋口隆康編［1978］『タレリ・ガンダーラ仏教寺院址の発掘報告　1963-67』同朋社.
『バーミヤン』　宮治昭監・編［2007］『ガンダーラ美術とバーミヤン遺跡展』静岡新聞社.
『ラニガト』　西川幸治編［1994］『ラニガト　ガンダーラ仏教遺跡の総合調査報告(1983-1992) 図版編　京都大学学術調査隊報告書』京都大学学術出版会.
Ackermann:　Ackermann, H.C.［1975］*Narrative Stone Reliefs from Gandhāra in the Victoria and Albert Museum in London : catalogue and attempt at a stylistic history*. IsMEO, Rome.
Foucher:　Foucher, A.［1905］*L'art Gréco-bouddhique du Gandhâra*. vol. 1, Imprimerie Nationale, Paris.
Gandhara:　Kunst-und Ausstellungshalle der Bundesrepublik Deutschland［2008］*Gandhara, das buddhistische Erbe Pakistans, Legenden, Klöster und Paradiese*. Philipp von Zabern, München.
Ingholt:　Ingholt, H.［1957 (repr, 1971)］*Gandharan Art in Pakistan, with 577 illustrations photographed by Islay Lyons and 77 pictures from other sources*. Introduction and Descriptive Catalogue by Harald Ingholt. Panthenon, New York.
Sehrai:　Sehrai, F.［1978］*The Buddha story in Peshawar Museum*. Peshawar Museum, Peshawar.
Zwalf:　Zwalf, W.［1996］*A Catalogue of the Gandhara Sculpture in the British Museum*. vol. I, British Museum Press, London.

註

① Foucher, A.［1905］*L'art Gréco-bouddhique du Gandhâra*. 1 vols., Imprimerie Nationale, Paris, pp. 334-336.; Foucher, A.［1949］*La vie du Bouddha, d'après les textes et les monuments de l'Inde*. Paris., p. 86.

② vivāha-saṃskāra とは、「結婚式の浄法」という意味である。古代インドには数々の浄法がみられるが、そのなかでも結婚式は重要なもののひとつである。

③ Foucher, A.［1905］p. 335.

④ Ackermann, H.C.［1975］*Narrative stone reliefs from Gandhara in the Victoria and Albert Museum in London : catalogue and attempt at a stylistic history*. IsMEO, Rome., Pl. XIIa; Ingholt, H. & Lyons, I.［1957］*Ghandharan Art in Pakistan: With 577 illustrations photographed by Islay Lyons and 77 pictures from other sources*. Intruduction and Descriptive Catalogue by Harald Ingholt, (repr, 1971), New York., p. 57 (No. 33,34); Sehrai, F.［1978］*The*

Buddha story in Peshawar Museum. Peshawar Museum, Peshawar., pp. 30-31 (No. 19).

⑤ Verardi, G. [1994] *Homa and other fire rituals in Gandhāra* (Annali 54, *Supplemento no. 79*). Istituto Universitario Orientale, Napoli.

⑥ Verardi, G. [1994] pp. 4-5.

⑦ この人物を「使用人」だとする意見（Ackermann, H.C. [1975] Pl. XIIa, pp. 65-66）と、「バラモン」であるとする意見（Sehrai, F. [1978] No. 19, pp. 30-31）があるが、結婚式の進行を司るのはバラモンであるので、後者のほうが妥当であろう。

⑧ 栗田氏によって「結婚式」の場面として紹介されている作例（栗田 [2003] Pl. 115）には、椅子に腰かけ、足元の壺に柄酌で水あるいは油を注ぐ女性像が認められる。この作例にみられるのは女性像のみであり、「結婚式」図の特徴である①の描写がみられないため、本稿では「結婚式」の場面として扱っていない。しかしながら、ヴェラルディは、この作例において壺の中に花または草の束が差し込まれている表現がみられることに注目している（Verardi, G. [1994] p. 4)。本稿でとりあげた作例にもいくつか類似した表現がみられるが〔図１〕〔図12〕、ここにみられる水壺と草の表現に関しては、民俗学者による現代のインドにおける調査結果に、本図のモティーフと関係すると思われる儀礼があることを指摘しておきたい。現地（インド・ジャイプル）で行った調査報告によると、現代のインドにおいて、結婚式の際に水瓶（Kumbha）を水などで満たし、葉を飾る儀礼があるという。(脇園賀子 [2001]「壺中の聖水―インドにおける豊穣性と浄化性の自然観―」『北九州大学文学部紀要』人間関係学科12、pp. 99-116.)

⑨ ラニガトから出土した作例。やや欠損しているため判然としないが、釈迦の右手と花嫁の左手がつながれているように見える。また、祭火の表現が他の作例とは異なり、燭台に火が灯されている。(西川編 [1994] Pl. 121-4)

⑩ なお、ガンダーラ仏伝図の影響を受けていると思われるキジル石窟第110窟に描かれている仏伝図にも「結婚式」の場面がみられるが、ここでは釈迦と花嫁の手は繋がれておらず、ガンダーラ仏伝図にみられる「結婚式」の場面とは異なる描写をみせていることを指摘しておきたい。キジル石窟第110窟における「結婚式」図に関しては以下を参照のこと。(Le Coq, A.V. [1924 (repr. 1974)] *Die Buddhistische Spätantike in Mittelasien*. vol. III, Berlin, taf. 6, 7; Grünwedel, A. [1912] *Altbuddhistisch Kultstätten in Chinesische-Turkistan*. Berlin, p. 118; Yalsiz, M. [1987] *Archaologie und Kunstgeschichte Chinesich-Zentralaisens (Xinjiang)*. Leiden, p. 82, no. 49-16; 中川原育子 [1994]「キジル石窟第110窟（階梯窟）の仏伝図について」『密教図像』13、pp. 24-25, 29-30.)

⑪ これらの仏伝文献には、さらに「妃選び」のエピソードが含まれるものとそうでないものがあるが、このエピソードは「結婚式」の場面には直接的に影響しないため、今回は考察対象としない。

⑫ 仏伝文献には釈迦の妃の人数を１名とするものと３名とするものがあり、妃の名前にも異同がみられるが、これらの問題が図像上の描写に影響を与えているわけではないと考えられるため、今回は考察対象としない。この問題に関しては外薗氏による研究がある。(外薗幸一 [1977]「Lalitavistara に於ける釈尊妃名について」『鹿児島経大論集』17-4、pp. 113-48; 同 [1979]「Lalitavistara に於ける釈尊妃 Gopā について」『鹿児島経大論集』19-4、pp. 69-96.)

⑬ 『仏本行経』の漢訳者は、現在伝では宝雲とされているが、これに関してはいくつかの異論があり、意見の一致をみていない。たとえば、干潟氏は「漢訳者は現在伝では宝雲となっているが、これは誤りであろう。(干潟龍祥 [1966]「馬鳴の仏所行讃とその余影」『印度学仏教学論集 金倉博士古希記念』平楽寺書店、p. 340)」と述べている。後藤氏は「竺法護の訳出の可能性が高く、

宝雲の手になる可能性は低いことが明らかとなった。(後藤義乗 [2007]「仏本行経・四天王経の漢訳者」『印度学仏教学研究』55(2)、p. 979)」とし、小谷氏は「『仏本行経』の訳者が曇無讖であり、5世紀初 (420年頃)、涼州 (武威) でなされた可能性が強くなった。(小谷仲男 [2010]「ガンダーラ美術と『仏本行経』 ―末羅力士移石説話を中心に―」『史窓』67、p. 164)」と述べている。

⑭ atha khalu punas tena samayena daṇḍapāṇiḥ śākyaḥ svāṃ duhitaraṃ gopāṃ śākyakanyāṃ bodhisattvāya prādāt. sā ca rājñā śuddhodanenâupūrveṇa bodhisattvāya vṛtâbhūt. (外薗 [1994] p. 592)

⑮ 場面は異なるが、『仏本行経』だけにみられる描写がガンダーラの浮彫にみられることは、小谷氏によってすでに指摘されている (小谷 [2010] p. 19)。

⑯ ヴェーダ祭式の体系は、「家庭祭式 (Gṛhya)」と「シュラウタ祭式 (śrauta)」の2種に大きく分けることができる。前者は、個人の家庭において行なわれる誕生儀礼、ヴェーダ学習儀礼、結婚儀礼、葬送儀礼などのいわゆる「人生通過儀礼」を中心とするもので、ひとつの祭火が用いられる。後者は、祭場、祭式手続きがより大規模で、共同体の首長が祭主となって執行され、複数の祭火 (三祭火、あるいは五祭火) が用いられる。なお、シュラウタ祭式を執行するものは、必ずすでに家庭祭を行なっていなければならないとされる。(井狩彌助 [2003]「ヴェーダ祭式の祭火とその象徴思考について」『聖なるものの形と場』国際シンポジウム第18集、国際日本文化研究センター、p. 303.)

⑰ ガンダーラ仏伝図にみられるモティーフを GS. を使って読み解くという研究手法は、クワリオッティによってすでに行なわれている (Quagliotti, A.M. [2000] "The 'Parting of the Hair': A Ghandhāran Relief with Two Scenes from Buddha's Life". *Annali dell'Università degli Studi di Napoli "L'Orientale"*. Sezione orientale, 60-61, Napoli, pp. 233-245.; Quagliotti, A. M. [2006] "A Ghandhāran Relief with Two Scenes from Buddha's Life", *Gandhāran Buddhism: Archaeology, Art, Texts*. UBC Press, Vancouver, pp. 225-242.)。また、図像にみられる saṃskāra に関する研究に、シヴァラマムールティの論考がある (Sivaramamurti, C. [1955] "Samskāras in Sculpture". *Arts Asiatiques* 2. Paris, pp. 3-17.)。

⑱ 辻直四郎 [1976]「古代インドの婚姻儀式」『鈴木学術財団研究年報』12/13、pp. 20-45. (再録：辻直四郎 [1977]『ヴェーダ学論集』岩波書店、pp. 282-329.)

⑲ Verardi, G. [1994] pp. 4-6. このほか、パーニグラハナ、サプタパディーに言及しているが、これらは註でふれられているのみである。

⑳ 辻 [1976] pp. 20-45; Gopal, R. [1959] *India of Vedic Kalpasūtras*. Motilal Banarsidass, Delhi, pp. 222-237.; Auboyer, J. [1994] *Daily Life in Ancient India*. Munshiram Manoharlal, New Delhi. (English trans. of *La vie quotidienne dans l'Inde ancienne*, Paris, 1961), pp. 176-185.

㉑ gṛbhṇāmi te saubhagatvāya hastamiti. dakṣiṇena pāṇinā dakṣiṇaṃ pāṇiṃ gṛhṇāti sāṅguṣṭhamuttānenottānaṃ tiṣṭhannāsīnāyāḥ prānmukhyāḥ pratyanmukhaḥ. (*Śāṇ-GS., I. 13. 2.*)

なお、和訳にあたってオルデンベルグによる英訳 (Oldenberg, H. [1886] *The Grihya Sutras*. Part 1, The Sacred Books of the East, Volume 29, Oxford, pp. 35-36) を参考にした。

㉒ 辻 [1976] pp. 35-36.

㉓ Gopal, R. [1959] pp. 230-231.

㉔ 右遶の回数は GS. によって異同がある。なお、婚姻儀礼において使用した聖火は、新家へ運び移され、以後家火として常時護持されなければならない。(辻 [1976] p. 35)

㉕ pradakṣiṇamagnimudakumbhaṃ ca triḥ pariṇayañajapati. amohamasmi sā tvaṃ. sā tvamasyamohaṃ. dyauraham pṛthivī tvaṃ. sāmāhamṛktvaṃ. tāveha vivahāvahai. prajām prajanayāvahai saṃpriyau rociṣṇū sumanasyamānau jīveva śaradaḥ śatamiti. (*Āś-GS., I. 7. 6.*)
なお、和訳にあたって次の英訳を参考にした。(Āś-GS., p. 150; Oldenberg, H. [1886] pp. 167-168)

㉖ pradakṣiṇamagnim paryāṇīya. (*Śāṇ-GS., I. 13. 13.*)
なお、和訳にあたってオルデンベルグによる英訳 (Oldenberg, H. [1886] p. 37) を参考にした。

㉗ 辻 [1976] pp. 35-36.

㉘ 辻 [1976] p. 35.

㉙ 本稿でとりあげたĀś. も、パーニグラハナの直後にアグニ・パリナヤナを規定している。そのほかのGS. については辻 [1976] pp. 309-311を参照のこと。

㉚ 辻 [1976] pp. 31-37.

㉛ 辻 [1976] p. 35.

㉜ 『マヌ法典』には「ドヴィジャの先頭者 (ブラーフマナ) の場合は、水による娘の贈与 (カンニャーダーナ *Kanyā-Pradāna, Kanyā-dāna*) が推奨される。しかし他の身分にとっては、相互の意志による〔それが推奨される〕。(『マヌ法典』3.35：渡瀬信之訳 [1991]『サンスクリット原典全訳 マヌ法典』中公文庫、p. 435)」というように「水による娘の贈与」という記述がみられるが、その儀礼の詳細は不明である。しかしながら、これと同名の儀礼 (*Kanyā-dāna*) をいくつかのGS. にみることができる。GS. における *Kanyā-dāna* は「(結婚式において) 父が娘を花婿に与える儀式」というものであり、新婦を新郎の手に渡す重要な儀式なのだが、これを規定するGS. は少ない。カニャーダーナに言及するGS. のうち、マーナヴァ・グリヒヤスートラ (I. 8. 11) およびカータカ・グリヒヤスートラ (16. 5) は、カニャーダーナの最後に新婦に灌水することを規定している (辻 [1976] p. 34. 儀礼の詳細はGopal, R. [1959] pp. 225～227に詳しい)。

図 1　Gandhāra 出土、
伯林寺所蔵、片岩、23.5cm×39cm×6.5cm
（出典：『バーミヤーン』fig. 41）

図 2　Takht-i-Bahai 出土 (probably)、
Private coll. Pakistan、灰色片岩、30cm
（出典：『栗田 I』fig. 116）

図 3　British Museum
（出典：Zwalf, fig. 169）

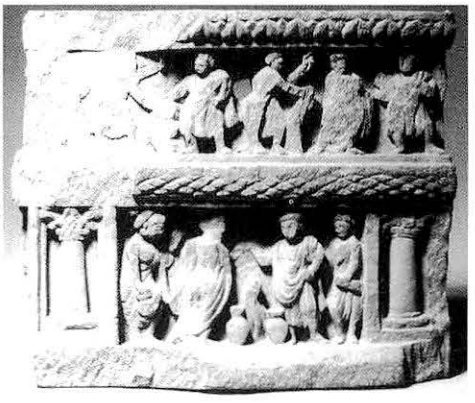

図 4　Sahri Bahlol 出土、
日本個人所蔵、灰色片岩、h. 17.5cm、w. 21cm
（出典：『栗田 I』fig. 112）

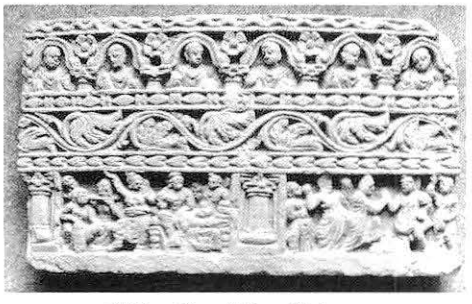

図 5　Gandhāra 出土、
日本個人所蔵、灰色片岩
（出典：『栗田 I』fig. 110）

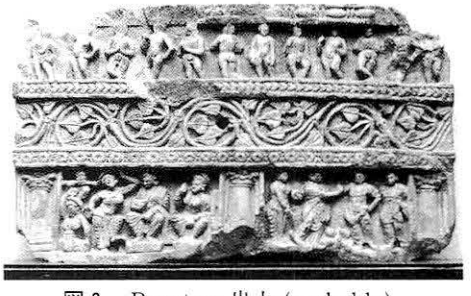

図 6　Roustam 出土 (probably)、
日本個人所蔵、緑色片岩、18cm
（出典：『栗田 I』fig. 111）

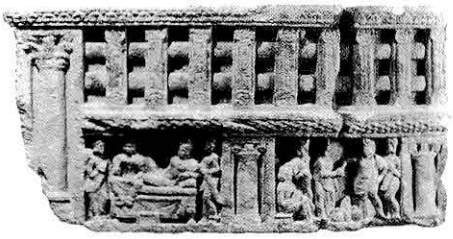

図7 Barikot 出土 (probably)、
東京都個人所蔵、灰色片岩、26cm
(出典：『栗田 I』 fig. 114)

図8 Kanjar-Kote (Swāt) 出土、
Victoria & Albert Museum (In-no. IM. 82-1939)、
灰色片岩、20.5cm (出典：Ackermann, Pl. XIIa)

図9 Swāt 出土、Musée du Louvre (No. 38)、10cm
(出典：Foucher, Fig. 172)

図10 Swāt 出土、Private coll. Peshāwar、
灰色片岩、18.5cm (出典：『肥塚』 挿図52c)

図11 Thareri (D10w) 出土、11×6cm
(出典：『タレリ』 Pl. 111-84)

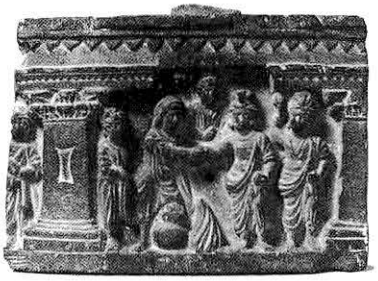

図12 Sahri Bahlol 出土、
Peshāwar Museum (Inv. Nr. PM-2748)、
灰色片岩、14×20×4.5cm
(出典：Gandhara, fig. 154)

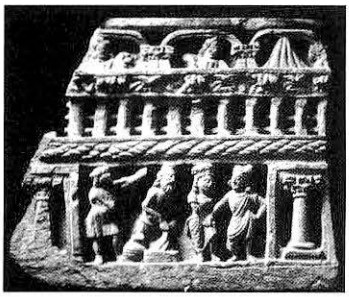

図13 Gandhāra 出土、
Spink & Son LTD.、灰色片岩、h. 12cm
(出典：『栗田 I』 fig. 113)

図14 Gandhāra 出土、
平山郁夫シルクロード美術館、灰色片岩、
h. 19.8cm、w. 34.7cm
(出典：『ガンダーラ』 fig. 43)

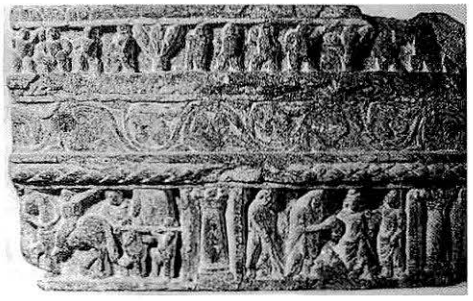

図15　Koi (Gandhāra)出土、
Lahore Museum（No. 1022）、灰色片岩、
h. 20cm、w. 34.5cm
（出典：Ingholt, No. 34）

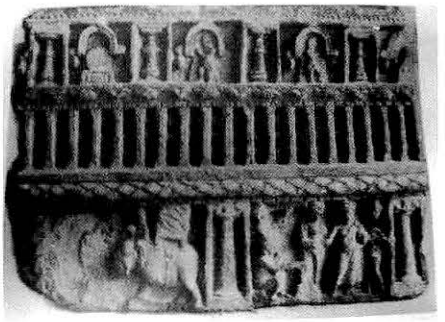

図16　Gandhāra 出土、Peshāwar Museum
（出典：Sehrai, No. 19）

図17　Ranigat (R101) 出土、10×10cm
（出典：『ラニガト』Pl. 121-4）

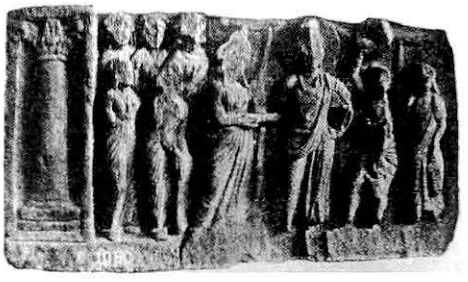

図18　Sangao (Gandhāra) 出土、
Lahore Museum
（出典：Foucher, Fig. 173）

図19　Bajaur 出土、日本個人所蔵、
緑色片岩、h. 23.5cm、w. 17cm
（出典：『栗田 I』fig. 109）